

リレー随筆

浪人生は良い人生？

今村総合病院 黒岩 俊志

初めまして。令和2年度より今村総合病院で初期研修をさせていただいております黒岩と申します。早速略歴になりますが、鹿児島生まれ鹿児島育ち、黎明学館幼稚舎 某私立小中高 浪人 長崎大学 初期研修医(現在)であります。

まだ働き始めてから数カ月という立場で、私のメッセージ性のない文章を医報に載せていただく運びとなり大変申し訳なく思っております。過去の先生方の文章を読ませていただきまして、どの先生方におかれましても素晴らしい内容と素晴らしい趣味をお持ちで尊敬の念を抱かざるを得ません。残念ながら私には特に趣味というものが無いので、初心にかえるという意味でも一番辛酸を嘗めていた浪人時代の話でもしたいと思えます。

私は大学入学時に某北 州予備校の小 駅校に寮生として過ごしていました。今では九州では佐賀県以外のどの県にもある北 州予備校ですが、その中でも最大規模の校舎である小 駅校に入学しました。北 備にはなぜか入学式というものが存在し、入学してから不合格体験記というものを書かされます。なぜ自分は前年度の受験で落ちたのかを自らの言葉で反省させます。それを心に刻ませる。そして、脱北していった(北 備を卒業することを脱北とよぶ)人々の合格体験記を読ませられます。こうなったら洗脳は完成されます。

自分の過去の失敗を胸に刻み、明るい未来を掴むために勉強するだけです。特に寮生は

囚人と呼ばれていました。小 駅校には男子寮・女子寮がいくつか存在しており、寮には毎日18時という門限があります。平日の夕方は授業延長しようが、門限を守らなければなりません。1秒でも遅刻すると、反省文を作文用紙数枚に渡って書かされ、1週間ほど自宅へ強制送還されます。たとえ、その寮生が北海道出身であろうと容赦はしません。それほど時間は有限で大切であることを日々感じさせてくれました。また、各寮の存在しているエリアがバラバラなので男女の寮問わず一番遠い寮の寮生は、授業が終了すると小 駅構内を全力疾走して寮に帰ります。私の寮は駅から比較的近い方であったため、そこまで走ることはありませんでしたが、真横を真面目そうな女子が脇目も振らず全力で走っていました。こうやって体力・運動不足を解消させる予備校は本当に素晴らしいなと感じました。また、同じ寮の寮生は寝食自習を共にするため仲は比較的良いのですが、違う寮出身に対するライバル心は想像以上でした。私ははじめ全く何も感じていませんでしたが、私たちの寮は駅近であったためそれをよく思わない寮の遠い子たちがバチバチ感を出して来たり、うちの寮は良くない噂をされており下に見られていました。そのことで私自身も、他寮の寮生には成績で負けないようにしようという負けん気が出てきたことで、クラスで上位・寮生の中では1番を取ることができ、大変良い刺激を貰っておりました。こういったハリーポッターを想像させる寮対抗もまさ

に北 備の描いた戦略だったのでしょ。

ただ、うちの寮にも問題がありました。本当にクセの強い子たちばかりが揃っており、いたずら好きな寮生が多くいました。寮生の「門限」以外のもう一つのルールとして、他室訪問禁止というものがあります。たとえば隣の部屋でも1歩でも他人の部屋を跨いでいるのを寮長・寮母に見られると、反省文+強制送還です。ただ、バレたらの話ということでそこを逆にスリルを味わいたいとして、寮生が食堂で勉強を集団でしているときにトイレで抜けるフリをして他人の部屋に侵入し、他人の部屋のをすべて逆さまにするという悪戯が流行りはじめ、半沢直樹さながらやられたら倍返しでやり返されていました。部屋には鍵がかけられるのですが、その鍵をなぜか解除できるやつが存在し、いつ自分も悪戯されるかヒヤヒヤしていました。幸いにも私は1年間何もされなかったです。

また、年に1回だけ寮生はその土地の花火大会・夏祭りに行くことができ、その日は夕方から夜の自習の時間に夜23時を門限とし、外出できません。女子寮の女の子とお祭りデートをする者や、祭りを存分に楽しむ者、祭りには参加せず、焼肉食べ放題でお腹いっぱい食べる者など多種多様で、私は男4、5人で祭りの屋台のものを食べたり、辻利の抹茶パフェを食べたり時間いっぱい遊びました。寮までの帰り道は、さすが北九州ということもあり、恐ろしい雰囲気にも包まれていて絡まれないようにダッシュで走った記憶があります。寮に戻ると恐ろしい事件が待ちっていました。私のいた寮は元々潰れたシティホテルを買い取ったもので、各部屋にユニットバスがありました。ある寮生が祭りで金魚すくいをして捕った金魚を寮に持ち帰り、別の寮生の部屋のお風呂に放し飼いをする悪戯がありました。この後の金魚の結末は恐ろしいものでした…。

ここからは良い思い出を述べさせていただきます。自分は周りに恵まれていて、今年こそは合格するために勉強をしたいというメンバーが数人集まって、消灯後は勉強していると寮長に怒られるので、それじゃあ早く起きて勉強しようということでそのメンバーで一番早起きの子が毎朝5時に部屋をノックしてくれて、眠い目を擦り、寒い廊下で毛布にくるまりながら朝食の7時まで勉強を続けたのを覚えています。冬からセンター試験の間まではこの生活を続けました。その習慣はみんなが居たからこそ続けられたものであって、彼らの存在がなければ医学部合格は遠かったかもしれません。

今とは違い、自由やお金もない中で寮生のときは小さな幸せというものがありました。それは、寮の近くの100円ローソンに行き100円のデザートの一つ買うことでした。おかげで体重は増えましたが、100円であんなに幸せを感じさせてくれる北 備の生活は本当にかげがえのないものでした。ありがとう北 備！

今回は文章を書かせていただくことで、医師を目指していた頃の初心を思い出すことができました。このような機会を頂戴し誠に感謝致します。また拙い文章に時間を割いて読んでいただきありがとうございました。

今後も小さな幸せを見つけつつ素晴らしい医師になれるよう励んでいきたいと思ひます。

次号は、鹿児島大学病院 徳重沙樹先生のご執筆です。
(編集委員会)